

「ワンダーフォーゲルクラブに入会するための

良い答え

マキちゃんの「答え」。わたしには意味がよく分からなかったけれど、なんだか良さそうだと思う。このカフェの壁にも合う。

彼女がギターを弾けるといのは初耳だった。

マキちゃんの「答え」。わたしには意味がよく分からなかったけれど、なんだか良さそうだと思う。このカフェの壁にも合う。

ケイくんは、四千円ぐらいの「答え」を量産中だった。彼らしく、どれも車の雑誌の切り抜きを使ったカラージュだった。まあまあセンスだから四千円は確実そうだけど、ワンダーフォーゲルクラブの入りはどうか。

一方ワンくんは、何も作っていない。いつもと同じように「興味がない」と言った。

もしくは、

4千円を手に入れるための

まあまあな答え」

その十畳ほどの広さの正方形の部屋は、三面の壁が艶のない、埃っぽい黒で塗られていた。ドアを含めた前面は全てガラス張りだったので、天井が低くてもそれほど閉塞感はなかった。その場所、随時開かれていた説明会に友人のマキちゃんと連れだって出席した。わたしたちの他に七、八名の参加者が適当に並べられたプラスチック製の椅子に腰掛けた。すぐに、健康そうでにこやかな、感じの良い青年が二人、早足で部屋に入ってきてわたしたちの前に立った。二人とも、予想通りのラフな服装で、一人は紺色のTシャツに黒のパンツ、眼鏡を掛けている。Tシャツには、ペールブルーの文字で「CLIMB TO THE SKY」とプリントされていた。二人の印象は、とてもよく似ていて、次に会った時に服装が違っていたら、どちらがどちらだか見分けがつかなくなってしまいそうだ。

二人は、簡単に自己紹介を済ませ、互いに目配せをした。そして、チェックシャツの青年が話しはじめた。

「これが問題です。」と言って、古い日本の雑誌の表紙みたいなものをわたしたちに見せた。それは和紙のような薄く透ける紙の貼り絵で描かれた風景と人物。具体的に描かれているわけではないので、抽象画にも見える。白地に色数は多くはない。落ち着いた淡い色調で田園風景があらわされている。遠景は山の稜線。近景は登山者か。横書き数字のひらがなの列が画面二箇所配されている。昭和初期風の文字のことばの意味も分からないし、風景画のような画像との関連性も理解できなかった。

続けて眼鏡の青年が「例」をいくつか見せてくれた。ドローイングやカラージュのようなもの。ポスターやチラシみたいなグラフィックデザイン風なもの。様々だが、特に奇抜なものはなく、どれも落ち着いた良いものだが、「問題」ほどではないような気がした。

ひと通り「例」を見せ終わると、青年二人は「分かりましたよね」、「じゃあ、がんばって下さい」などと軽く言って、入ってきた時と同じように足早に部屋を出て行った。

わたしは、何かを聞き逃してしまったような気がして、彼らを追って部屋を出ようとした。けれど、重いガラス扉の前で他の参加者たちと渋滞になってしまった。部屋を出られた時には二人の姿は見えなかった。

要するに、その問いにまあまあよい答えを出すと、四千円が貰える。そして、とっても良い答えを出すワンダーフォーゲルクラブに入れるのだ。

けれど、肝心の「問題」を自分が理解できているのか怪しい。一緒に説明会に参加したマキちゃんに「全然分からない」と言うと、「なんて分からないの」と、少し驚いていた。マキちゃんは感覚が優れている。鈍い私に読めなかった何かのマキちゃんには色鮮やかに掴めたのだろう。マキちゃんは、自分の「答え」がほとんどできていたので、わたしに見せてくれると言った。

二人で花の名前のついたカフェに入った。わたしはカフェオレを注文し、マキちゃんはハイビスカスティーを頼んだ。木造のアパートを改装したカフェフロアは、灯りを点けておらず、ほの暗く柔らかな自然光が入っていた。ハイビスカスティーのガラスのティーカップが光を集めてテーブルの

数日後、わたしは、わたし自身が納得のいく「問題」の解釈と「答え」の方向を導き出せずにいた。誰かからヒントを貰いたくて家を出た。偶然の通りがかりを装うつもりでワンダーフォーゲルクラブの拠点となっている地下室へ通じる階段の上に立ち止まった。

クラブの会員にならなければ、その地下室への入室は許可されない。地下室の入口は、黒く塗られた重そうな扉で閉ざされている。ワンダーフォーゲルのイメージとは正反対のディスプレイクラブや怪しげなゲームセンターの扉の様だ。

階段の上では、会員の男性三人が楽しそうにロッククライミングの話をしている。顔見知りだけど、名前も知らない彼らにわたしは、必要以上の笑顔で「こんにちは」と話しかけた。そして、大袈裟にならないように気を使いながら自分の悩みを話した。「難しいですよ」と問いかけると、三人とも揃って「ぜんぜん簡単だよ」と答えた。

いつでもその場所に先に行けた人は、それを「簡単」と言う。

さて、わたしはどんな「答え」を出そう。

「ワンダーフォーゲルクラブに入会するための良い答え

もしくは、
4千円を手に入れるための
まあまあの答え」

その十畳ほどの広さの正方形の部屋は、三面の壁が艶のない、埃っぽい黒で塗られていた。ドアを含めた前面は全てガラス張りだったので、天井が低くてもそれほど閉塞感はなかった。その場所で、随時開かれている説明会に友人のマキちゃんと連れだつて出席した。わたしたちの他に七、八名の参加者が適当に並べられたプラスチック製の椅子に腰掛けた。すぐに、健康そうてにこやかな、感じの良い青年が二人、早足で部屋に入ってきて、わたしたちの前に立った。二人ともラフな服装で、一人はチェックのシャツにベージュのパンツ、もう一人は紺色のTシャツに黒のパンツを着て、眼鏡を掛けている。Tシャツには、パールブルーの文字で「CLIMB TO THE SKY」とプリントされていた。二人の印象は、とてもよく似ていて、次に会った時に服装が違っていたら、どちらがどちらだか見分けがつかなくなってしまうそうだ。二人は、簡単に自己紹介を済ませ、互いに目配せをした。そして、チェックシャツの青年が話しはじめた。

「これが問題です。」と言って、古い日本の雑誌の表紙の絵柄、みたいなものをわたしたちに見せた。それは和紙のような薄く透ける紙の貼り絵で描かれた風景画で、さほど具体的に描かれているわけではないので、抽象画にも見える。白地に色数は多くはない。落ち着いた淡い色調で田園風景があらわされている。遠景は山の稜線、近景は登山者か。横書き数文字のひらがなの列が画面二箇所に配されている。昭和初期風の文字の、ことばの意味も分からないし、風景画のような図像との関連性も理解できなかった。牧歌的だが、嫌味なく洗練された画面構成に静かな力を感じる。

続けて眼鏡の青年が「解答例」をいくつか見せてくれた。ドローイングやカラージュのようなもの。ポスターやチラシみたいなグラフィックデザイン風なもの。様々だが、特に奇抜さはなく、どれも落ち着きのある良さがあるが、「問題」ほど、理屈抜きの好感を持たせるものではなかった。

気だ。薄暗く、微臭い廊下には、湿気を含んだ埃が塊になって転がっている。その廊下の中間あたりに田守さんの部屋の引き戸がある。その軋んだ戸を開けると、廊下とは対照的に明るい空間があった。磨りガラス越しの白色透明の光と何度も白いペンキで塗り重ねた壁の自然な凹凸が長閑な空気感を作っている。その壁ざわに寄せた長机の上に田守さんの「答え」の数々が並べられていた。

わたしは、田守さんの一見するとゴミのような大量の「答え」たちに戸惑った。何かを作ったり抜き出した後、後で欠片やカスでそれらはできている。例えば、一辺が十センチ程の歪んだ直方体に切り取られた発泡スチロール（「答え」のために切断された訳ではなく、別の目的のために切断され、その目的には不必要な部分だと推測できる）に沢山の五寸釘が刺さっている、や丸められた古新聞紙を少し解したものなど。それらがゴミじゃなく、「答え」であるように見えるのは、観られることを待っている様な、人待ち顔をしている愛らしさを感じさせるからかもしれない。

田守さんの全ての「答え」がワンダーフォーゲルクラブに入れる訳ではないと思う。けれどもどれかかに入れる可能性は高いと思った。もちろんいくつかの「答え」は、四千円が確実に取れるだろう。

田守さんの沢山の「答え」に悪酔い気味になっても、やっぱり自分の「答え」が見つからなかったわたしは、もう一度、ワンダーフォーゲルクラブの地下室の前に来ていた。クラブの会員にならなければ、その地下室への入室は許可されない。地下室の入口は、黒く塗られた重そうな扉で閉ざされている。ワンダーフォーゲルのイメージとは正反対のデイスコクラブや怪しげなゲームセンターの扉の様だ。階段の上では、会員の男性三人が楽しそうにロッククライミングの話をしている。顔見知りだけど、名前も知らない彼らに、わたし

ひと通り「解答例」を見せ終わると、青年二人は「分かりましたよね」、「じゃあ、がんばって下さい」などと軽く言って、入ってきた時と同じように足早に部屋を出て行った。わたしは、何かを聞き逃してしまったような気がして、彼らを追って部屋を出ようとした。けれど、重いガラス扉の前で他の参加者たちと渋滞になってしまった。部屋を出られた時には二人の姿は見えなかった。要するに、その問いにまあまあよい答えを出すと、四千円が貰える。そして、とても良い答えを出すとワンダーフォーゲルクラブに入れるのだ。だけど、肝心の「問題」を自分が理解できているのか怪しい。一緒に説明会に参加したマキちゃんに「全然分からない」と言うと、「なんて分からないの」と、少し驚いていた。マキちゃんは感覚が優れている。鈍いわたしに読めなかった何かがマキちゃんには色鮮やかに掴めたのだろう。マキちゃんは、自分の「答え」がほとんどできていたので、わたしに見せてくれると言った。

二人で花の名前のついたカフェに入った。わたしはカフェオレを注文し、マキちゃんはハイビスカスティーを頼んだ。木造のアパートを改装したカフェのフロアは、灯りを点けておらず、ほの暗く柔らかな自然光が入っていた。ハイビスカスティーのガラスのティーカップが光を集めてテーブルの上に星の粒を作った。マキちゃんは大きな紙袋から三十七センチ角ほどのパネルを恭しく取り出した。彼女の手つきは、独特で美しく、つい見落れてしまう。そのパネルには品の良いロココ調の花柄の布が張られていた。布地は、部分的に白っぽい絵の具で塗りつぶされている。ところどころ、白が透けて地の花模様が見える部分もある。その布の上に白ゴージャの皮が乗せられている。うっすらとグリーンがかかった白ゴージャの皮は、ゴージャの身からべろっと剥がすと表面のぼこぼこのついた格子状のレースになる。その編み目を通して、布地の花模様がちらちらと覗く。「あとは、実家からギターを持ってきて演奏するの」とマキちゃんは言った。わたし

しはカフェオレをすすった。彼女がギターを弾けるというのは初耳だった。

マキちゃんの「答え」。わたしには意味がよく分からなかったけれど、なんだか良さそうだと思った。このカフェの壁にも合う。

マキちゃんと別れた後、斜めの光線がまだ家に帰る気を起こさせないので、ワンくんを呼び出した。ワンくんは丁度、ケイクんの家に向かう途中だったので同行することにした。ケイクんは、四千円ぐらいの「答え」を量産中だった。彼らしく、どれも車の雑誌の切り抜きを使ったカラージュだった。まあまあセンスだから四千円は確実そうだけど、ワンダーフォーゲルクラブの入部はどうだろう。一方ワンくんは、何も作っていない。いつもと同じように「興味がない」と言った。

数日経っても、わたしは、わたし自身が納得のいく「問題」の解釈と「答え」の方向を導き出せずにいた。誰かからヒントを貰いたくて家を出た。偶然的通りがかりを装うつもりでワンダーフォーゲルクラブの拠点となっている地下室へ通じる階段の上に立ち止まった。その時、二人の男性が階段を上がってきた。

一人は、顔見知りの会員で、もう一人には見覚えがなかった。片方がわたしに「こんにちは」とだけ言って足早に去っていった。残った男性は、初対面なのにも関わらず、居心地の悪さを感じていなさそうな朗らかな印象だった。二人で当たり障りの無い会話を交わしているうちに、お互いがともに「問題」の「答え」を提出しようとしていることに気づいた。わたしは、その男性の場慣れした雰囲気にとっくに会員になっているものだと思い込んでいた。彼は、「田守秋浩」と名乗った。田守さんのスタチオは、ここからとても近い。ちょっとした時間潰しに見学に行くことにした。

何人かで共同で借りているというその建物は、汚れたコンクリートの外壁で古い診療所のような雰囲気

は必要以上の笑顔で「こんにちは」と話しかけた。そして、大袈裟にならないように気を使いながら自分の悩みを話した。「難しいですよ」と問いかけると、三人とも揃って「ぜんぜん簡単だよ」と答えた。

いつでもその場所に行けた人は、それを「簡単」と言う。

さて、わたしはどんな「答え」を出そう。

本作は、二〇〇九年に初編。今作は、森田浩彰との共作として改訂。展覧会「Ryugu is Over」・竜宮美術館は終わります」に森田の作品と共に展示。※斜字部分が森田浩彰との共作のため改訂、加筆箇所。

「Ryugu is Over」・竜宮美術館は終わります」

会期：二〇一二年二月十七日～三月十八日

会場：竜宮美術館 神奈川

For a good answer you get admitted to the *Wandervogel Club*

/
for a reasonably good answer you get
4000 yen

‘Y.N. methodological...’

その十畳ほどの広さの正方形の部屋は、三面の壁が艶のない埃っぽい黒で塗られていた。ドアを含めた前面は、全てガラス張りだったので、天井が低くてもそれほど閉塞感はなかった。その場所で、随時間かかっている説明会に友人のマキちゃんと連れだって出席した。わたしたちの他に七、八名の参加者が適当に並べられたプラスチック製の椅子に腰掛けた。すぐに健康そうてにこやかな、感じの良い青年二人が早足で部屋に入ってきて、わたしたちの前に立った。二人ともラフな服装で、一人はチェックのシャツにベージュのパンツ、もう一人は紺色のTシャツに黒のパンツを穿いて、眼鏡を掛けている。Tシャツには、ペールブルーの文字で「CLIMB TO THE SKY」とプリントされていた。二人の印象はともよく似ていて、次に会った時に服装が違えば、どちらがどちらだか見分けがつかなくなってしまうそうだ。

二人は、簡単に自己紹介を済ませ、互いに目配せをした。そして、チェックシャツの青年が話しはじめた。

「これが問題です」と言っていて、古い日本の雑誌の表紙のデザインのような、どこか懐かしさのある絵をわたしたちに見せた。それは和紙のような薄く透ける紙の貼り絵で描かれた風景画で、さほど具体的に描かれているわけではないので、抽象画にも見える。白地に色数は多くはない。落ち着いた淡い色調で田園風景があらわされている。遠景は山の稜線、近景は登山者か。横書き数文字のひらがなの列が画面二箇所配されている。昭和初期風の文字のことばの意味は分からない。風景画のような図像とその文字との関連性も理解できなかった。しかしながら、牧歌的な雰囲気でありながらも嫌味なく洗練された画面構成に静かな力を感じる。

続けて眼鏡の青年が「解答例」をいくつか見せた。ドローイングやカラージュのようなもの。ポスターやチラシみたいなグラフィックデザイン風なもの。様々だが、特に奇抜さはなく、どれも落ち着いた良さがあるが、「問題」ほど理屈抜きの好感を持たせるものではなかった。

奏するの」とマキちゃんは、言った。わたしはカフェオレをすすった。彼女がギターを弾けるといいうのは初耳だった。マキちゃんの「答え」。わたしには意味がよく分からなかったけれど、なんだか良さそうだと思った。このカフェの壁にも合う。

マキちゃんと別れた後、斜めの光線がまだ家に帰る気を起こさせないので、ワンくんを呼び出した。ワンくんはちよと、ケイクんの家に向かう途中だったので同行することにした。ケイクんは、四千円ぐらいの「答え」を量産中だった。彼らしく、どれも車の雑誌の切り抜きを使ったカラージュだった。まあまあセンスだから四千円は確実そうだけど、ワンダーフォーゲルクラブの入会はどうだろう。一方ワンくんは、何も作っていない。いつもと同じように「興味がない」と言った。

数日後、その駅に降りたのは、ほんの気まぐれだった。約束の時間に一時間も早く着いてしまいそうだと気づき、慌てて電車を飛び降りた。目的地よりも二駅手前のその駅には、今までに一度も降りた記憶が無かった。約束の前の時間潰しとして咄嗟に思いついた割には、山手線二駅分の散歩という、なかなかのアイデアに満足した。

改札を出て、目の前の路地に入りジグザグに進んでみた。すぐに住宅街が始まり、林立する数階建てのアパートの隙間に一軒家が窮屈に植え込まれている。さらに細い路地の行き止まりに、真新しく塗り込めた白と不釣り合いな五角形の建物が目についた。その壁には、横長の四角い凹みに見える窓があった。近づくと、その窓が中の様子を外の人に見せるために設えられたものだとよく分かる。パノラマ写真を手取るみたいに中の様子を左から右へ流れる景色のように眺める。その空間に含まれる存在と気配が静かに佇んでいるように感じた。矩形の中の

キューブ、その内側に鮮やかな形と迷いのない色とそれらが連なる存在が見えた。そのカラーとした深い雰囲気にも自分のいる側が水の中にいるような湿度を感じた。キューブの中の流れる陰影と時間の過りも、内側なのに外よりも解放されている空気も、ガラス一枚で隔てた景色がわたしと地続きではなくて、理想の地の果てを思わせる景色だった。建物の中の人々がわたしに気づき、招き入れるような仕草をした。けれども、これ以上は何かを知りたくない気がして、慌ててその場所に背を向け、歩き出した。角を一つ曲がっただけで、中華料理の油の臭いとパチンコ屋の目まぐるしく氾濫する音がわたしを現実に戻した。

そのあと、道すがら見るものは、線と矩形と色とに置き換えられ、この目さえあれば何もものをも肯定できる、そんな気がした。だけど「この目」と呼んだ目は、わたしのではなくてあの人「野沢裕」のものだと思いなおし、噛みしめたあと、小さな青い炎が心臓に点った。とすぐにそれは燃え尽き、美しい灰になった。

この方法論でわたしの「答え」を提示するのは、どうかしら？

思考と心の整理がつかず、やっぱり自分の「答え」が見つからなかったわたしは、もう一度、ワンダーフォーゲルクラブの地下室の前に来ていた。クラブの会員にならなければ、その地下室への入室は許可されない。地下室の入口は、黒く塗られた重そうな扉で閉ざされている。ワンダーフォーゲルのイメージとは正反対のディスコクラブや怪しげなゲームセンターの扉の様だ。階段の上では、会員の男性三人が楽しそうにロックライミングの話をしている。顔見知りだけど名前も知らない彼らに、わたしは必要以上の笑顔で「こんにちは」と話しかけた。もしかしたらこの中に野沢裕がいるかもしれないと思っ

ひと通り「解答例」を見せ終わると、青年二人は「分かりましたよね」、「じゃあ、がんばって下さい」などと軽く言っていて、入ってきた時と同じように足早に部屋を出て行った。わたしは、何かを聞き逃してしまったような気がして、彼らを追って部屋を出ようとした。けれど、重いガラス扉の前で他の参加者たちと渋滞になってしまった。部屋を出られた時には二人の姿は見えなかった。要するに、その問いにまあまあよい答えを出すと、四千円が貰える。そして、とっても良い答えを出すとワンダーフォーゲルクラブに入れるのだ。だけど、肝心の「問題」を自分が理解できているのか怪しい。一緒に説明会に参加したマキちゃんに「全然分からない」と言うと、「なんて分からないの」と、少し驚いていた。マキちゃんは、感覚が優れている。鈍い私に読めなかった何かのマキちゃんには色鮮やかに掴めたのだろう。マキちゃんは、自分の「答え」がほとんどできていたので、わたしに見せてくれると言った。

二人で花の名前のついたカフェに入った。わたしはカフェオレを注文し、マキちゃんはハイビスカスティーを頼んだ。木造のアパートを改装したカフェフロアは、灯りを点けておらず、ほの暗く柔らかな自然光が入っていた。ハイビスカスティーのガラスのカップが光を集めてテーブルの上に星の粒を作った。ゆっくりと、ひとつひとつ飲物を口に含んだ。マキちゃんは大きな紙袋から三十センチ角ほどのパネルを恭しく取り出した。彼女の手つきは、独特で美しく、つい見落されてしまう。そのパネルには品の良いロココ調の花柄の布が張られていた。布地は、部分的に白っぽい絵の具で塗りつぶされている。ところどころ、白が透けて地の花模様が見える部分もある。その布の上に白ゴヤーの皮が乗せられている。うっすらとグリーンがかった白ゴヤーの皮は、ゴヤーの身からべろっと剥がすと表面のぼこぼこのついた格子状のレースになる。その編み目を通して、布地の花模様がちらちらと覗く。「あとは、実家からギターを持ってきて演

たけれど、それは確かめずにおいた。そして、大袈裟にならないように気を使いながら自分の悩みを話した。

「難しいですよね」と問いかけると、三人とも揃って「ぜんぜん簡単だよ」と答えた。

いつでもその場所に行けた人は、それを「簡単」という。

さて、わたしはどんな「答え」を出そう。

本作は、二〇〇九年に初編。二〇一二年、展覧会… Ryugu’s Over… 竜宮美術館は終わります… に森田浩彰との共作として発表。その際に改訂。

今作は、アーティスト野沢裕氏の写真作品、インスタレーション、及び、制作スタイルをテーマにした個展のためのテキストとして再改訂した。

二〇一五年十月 大久保 あり

個展：「ワンダーフォーゲルクラブに入るための良い答えもしくは、4千円が手に入る まあまあな答え（Y.N.の方法論的）」

会期：二〇一五年十月二十九日〜十一月三日

会場：FIGURE 17-15 cas 東京

「ワンダーフォーゲルクラブに入るための良い答え
もしくは、4千円が手に入る まあまあな答え」

十畳ほどの広さの正方形の部屋は、三面の壁が艶のない埃っぽい黒で塗られていた。ドアを含めた前面は、全てガラス張りだったので、天井が低くてもそれほど閉塞感を感じられなかった。その場所で、随時開かれていた説明会に友人のマキちゃんと連れだつて出席した。わたしたちの他に七、八名の参加者が適当に並べられたプラスチック製の椅子に腰掛けていた。席に着いて間もなく、健康そうでにこやかな感じの良い青年二人が早足で部屋に入ってきて、わたしたちの前に立った。二人ともラフな服装で、一人はチェックのシャツにベージュのパンツ。もう一人は紺色のＴシャツに黒のパンツを穿いて、眼鏡を掛けている。Ｔシャツには、ペールブルーの文字で「CLIMB TO THE SKY」とプリントされていた。二人の印象はともよく似ていて、次に会った時に服装が違えば、どちらがどちらだか見分けがつかなくなってしまういそうだ。二人は、簡単に自己紹介を済ませ、互いに目配せをした。そして、チェックシャツの青年が話しはじめた。

「これが問題です」と言っ、古い日本の雑誌の表紙のデザインのような、どこか懐かしさのある絵をわたしたち参加者に見せた。それは和紙のような薄く透ける紙の貼り絵で描かれた風景画のようで、と同時に、さほど具体的に描かれているわけではないので、抽象的にも見える。白地に色数は多くはない。落ち着いた淡い色調で田園風景があらわされている。遠景は山の稜線、近景は登山者か。横書き数字文字のひらがなの列が画面二箇所に配されている。昭和初期風の文字の羅列。ことばの意味は分からない。風景画のような図像とその文字との関連性も理解できなかった。しかしながら、牧歌的だが、嫌味なく洗練された画面構成に静かな力を感じる。

続けて眼鏡の青年が「解答例」をいくつか見せてくれた。ドローイングやカラージュのようなもの。ポスターやチラシみたいなグラフィックデザイン風なもの。様々だが、特に奇抜さはなく、どれも落ち着いた良さがあるが、「問題」ほど理屈抜き的好感を持たせるものではなかった。

マキちゃんと別れた後、斜めの光線がまだ家に帰る気を起こさせないの、ワンくんを呼び出した。ワンくんは丁度、ケイクんの家に向かう途中だったので同行することにした。ケイクんは、四千円ぐらいの「答え」を量産中だった。彼らしく、これも車の雑誌の切り抜きを使ったカラージュだった。まあまあセンスだから四千円は確実そうだけど、ワンダーフォーゲルクラブの入部はどうだろう。た。彼らしく、これも車の雑誌の切り抜きを使ったカラージュだった。まあまあセンスだから四千円は確実そうだけど、ワンダーフォーゲルクラブの入部はどうだろう。

一方ワンくんは、何も作っていない。いつもと同じように「興味がない」と言った。

数日後、わたしは知人の実家に訪れるために静岡県のある町にいた。その知人―アノニムさんとは、秋の初めのケヤキの葉がまだ青々としていた神社の境内の骨董市で出会った。アノニムさんの露店は、周囲の雑多さと明らかに区切られた空気を漂わせていた。ヨーロッパの古い生活雑貨を扱っているという意味においては、他の店と大した差はない筈なのだが、何か違って見えた。ここにあるものは、選ばれ、集められ、提示され、というサイクルを幾度と繰り返し返され、淘汰の先にある「答え」なのだと思う。「審美眼」ということばが頭に浮かび、その得体を探ろうとしても、それは宙吊りのままにばらばらと消えていった。それはアノニムさんの持つ「眼」。その「眼」は、わたしが「答え」を出すのに必要なものと思えた。アノニムさんは、わたしが客ではないことに気づくと、迷惑がるどころか、逆に他のものも見せてくれると提案してくれた。

そうして、この場所に来ている。東海道中の宿場という目盛の一つと富士の山の縦軸の麓。それらの交わる座標上の位置。そして広大な海面と水平線を眺める窓。ここから外国の町の片隅の露店を想う。そこには、製産され、破壊され、見つけられ、愛でられ、仕舞われ、忘れられ、眠った顔がある。虫喰われ、見つけられ、捨てられ、拾われ、売られを、何度も経た鳥がここにいる。人の行為の時間の凝縮がこ

ひと通り「解答例」を見せ終わると、青年二人は「分かりましたよね」、「じゃあ、がんばって下さい」などと軽く言って、入ってきた時と同じように足早に部屋を出て行った。わたしは、何かを聞き逃してしまったような気がして、彼らを追って部屋を出ようとした。けれど、重いガラス扉の前で他の参加者たちと渋滞になってしまい、部屋を出られた時には二人の姿はなかった。

要するに、その問いにまあまあよい答えを出すと、四千円が貰える。そして、とっても良い答えを出すとワンダーフォーゲルクラブに入れるのだ。けれど、肝心の「問題」を自分が理解できているのか怪しい。一緒に説明会に参加したマキちゃんに「全然分からない」と言うと、「なんて分からないの」と、少し驚いていた。マキちゃんは、感覚が優れている。鈍いわたしに読めなかった何かのマキちゃんには色鮮やかに掴めたのだろう。マキちゃんは、自分の「答え」がほとんどできていたので、わたしに見せてくれると言った。

二人で花の名前のついたカフェに入った。わたしはカフェオレを注文し、マキちゃんはハイビスカスティーを頼んだ。木造のアパートを改装したカフェのフロアは、灯りを点けておらず、ほの暗く柔らかな自然光が入っていた。ハイビスカスティーのガラスのティーカップが光を集めてテーブルの上に星の粒を作った。マキちゃんは大きな紙袋から三十七センチ角ほどのパネルを恭しく取り出した。彼女の手つきは、独特で美しく、つい見落れてしまう。彼女が手にしたパネルには品の良いロココ調の花柄の布が張られていた。布地は、部分的に白っぽい絵の具で塗りつぶされている。ところどころ、白が透けて地の花模様が見える部分もある。その布の上にはうっすらとグリーンがかかった白ゴーヤの皮が乗せられている。白ゴーヤの皮は、ゴーヤの身からべろっと剥がすと表面にぼこぼこのついた格子状のレースになる。その編み目を通して、布地の花模様がちらちらと覗く。

「あとは、実家からギターを持ってきて演奏するの」とマキちゃんは、言った。わたしはカフェオレをすすった。彼女がギターを弾けるといのは初耳だった。マキちゃんの「答え」。わたしには意味がよく分からなかったけれど、なんだか良さそうだと思った。このカフェの壁にも合う。

の形になり現される。空間を観察するフォーカスが変えられるこの地点で、同じように時間を観察する眼を養ったのかしら、と思った。そしてそれは、自分にはできない気がした。この一地点の価値は、複雑で果てしない。

小旅行を終え、やっぱり自分の「答え」が見つからなかったわたしは、ワンダーフォーゲルクラブの地下室の前に来ていた。クラブの会員にならなければ、その地下室への入室は許可されない。地下室の入口は、黒く塗られた重そうな扉で閉ざされている。ワンダーフォーゲルのイメージとは正反対のデイスコクラブや怪しげなゲームセンターの扉の様だ。階段の上では、会員の男性三人が楽しそうにロッククライミングの話をしている。もしかしたら、かつてアノニムさんもここにいたかもしれない。そんな想像が過った。顔見知りだけど名前も定かじゃないその三人に、わたしは必要以上の笑顔で「こんにちは」と話しかけた。そして、大袈裟にならないように気を使いながら自分の悩みを話した。「難しいですよね」と問いかけると、三人とも揃って「ぜんぜん簡単だよ」と答えた。

いつでもその場所に先に行けた人は、それを「簡単」と言う。さて、わたしはどんな「答え」を出そう。

本作は、二〇〇九年に初編。二〇十二年、同作でのアーティスト森田浩彰との共作を機に改訂。それ以降の本作では、他者やその作品(あるいは商品)を文中に招聘する形を取る。展示の都度、共作者の変化とともに改訂を繰り返した。今作は、骨董品店アノニムとの共作として三度目の再改訂。

富士の山ピエンナーレ「フジノヤマ・タイムマシン」

会期…二〇一六年十月二十八日～十一月二十七日

会場…「大法寺」静岡県清水区由比

‘For a good answer you get admitted to the Wandervogel Club, or, for a reasonably good answer you get 4000 yen’

The three walls of the square room of about 16 square meters were painted in a matted dusty black. The front side of the wall including the door was made of glass and therefore the room did not feel cramped despite of the low ceiling. In here I participated in an information session with my friend Maki. Apart from us, another 7 or 8 participants were seated on unevenly lined up plastic chairs. Soon after our arrival, two healthy-looking, pleasantly smiling young men entered the room and at a quick pace went to stand in front of us. They were dressed casually, one wore a checked shirt and beige trousers and the other wore a navy blue T-shirt, black trousers and glasses. The pale blue characters “CLIMB TO THE SKY!” were printed on his T-shirt. They looked so similar that if they wore different clothes the next time I would not be able to remember which one is which. They introduced themselves briefly and exchanged looks. Then, the man with the checked shirt began to talk.

“Here is the question”he said and he showed us a nostalgic picture that looked like the cover of an old Japanese magazine. It showed something like a landscape scene, put together out of bits and pieces of thin and transparent paper that had a similarity to Japanese paper. It also looked like an abstract picture because wasn’t drawn very figurative. A few colors had been used against a white background depicting a countryside scene in calm soft colors. Was that a mountain ridge in the background? Was that a mountain hiker in the foreground? In two places, a few Hiragana characters were written horizontally. I could not understand the meaning of the words made up of random letters of the nostalgic typeface, never mind capture the relation between the image and the words. Nevertheless, you could not help but be drawn in by the simple and pastoral but refined composition of the picture.

Next, the young man wearing glasses showed us a few possible answers: some drawings, collages, and graphic design posters and brochures. They were all different but none of them were particularly special, and although they all conveyed certain calmness, none of them seemed to give me the same unexplainably good feeling as the picture of ‘questionh.

After showing us the possible answers, the two young men simply said “You get it, right? Well, good luck” and out they went from the room as quickly as they had entered. It felt as if I had forgotten to ask them something and I tried to follow them, but I was blocked by the other participants lining up in front of the heavy glass door. When I finally got out, the two men were already gone.

So, a reasonably good answer would get me 4000yen. And a really good answer would get me into the Wandervogel Club. However, I wasn’t sure I understood the ‘question’ itself. When I told Maki who had also attended the information session that “I don’t understand it at all,”she seemed surprised and said “What do you not understand?” Maki has a really good sense for things as opposed to my usual obtuseness. Maki was able to read everything and the deeper meaning of it all was vividly colorful to her. Maki had all but finished her ‘answer’ and promised to show it to me.

We both entered the cafe named after a flower. I ordered a caffè latte, while Maki ordered a hibiscus tea. The cafe space was really a repurposed wooden apartment unit. There were no lamps on and only a soft natural light illuminated the dim space. The light illuminated the glass cup of the hibiscus tea that then created tiny star-shaped dots of reflection across the table. Maki carefully took a panel of a square of thirty- centimeters out of a big paper bag. I was fascinated by her movements, which were always peculiar and graceful. On the panel, a canvas with a refined rococo flower design was fitted. A whitish paint had been dabbed onto the canvas in a few places. Here and there, the white was slightly transparent and the original flower print showed through. The peel of a white bitter melon was put on the fabric. The peel was slightly green and being peeled off thinly from the flesh, became bumpy like a grid of lace. Through the tiny holes in the grid, the flower print could be seen one moment and was gone the next. “I will also bring my guitar from my parents’ house and play music,”Maki said. I took a sip of my caffè latte. I had never heard before that she could play the guitar and I did not understand Maki’s answer well but had the feeling it was a good one. It would also fit well on the walls of this cafe.

After I said goodbye to Maki, the oblique sunlight was still in the sky and I did not feel like going home so I called my friend Wang. At that moment he was on his way to Kei’s house and so I accompanied him. Kei was in the process of producing lots of 4000yen-worth “answers”. Typically, all his works were collages made with pieces of automobile magazines. He had a reasonably good sense so I was sure they would get him 4000yen but I doubted they could get him admitted into the Wandervogel Club. On the other hand, Wang himself prepared anything. “I’m not interested,” he said as usual.

A few days later, I was in a town in Shizuoka prefecture to visit an acquaintance’s parents’ home. I met this acquaintance, ANONYME, at the antique market in the temple grounds, at the beginning of autumn when the zelkova leaves were still green. There was something in the air around ANONYME’s street stall, an atmosphere that clearly separated it from the miscellaneous surroundings. In the sense that it dealt in old European household goods, should not have differed greatly from the other stalls; however, something did seem different. I thought that the thing there had been selected as “answers” through countless cycles of being chosen, collected, and exhibited. The phrase “eye for beauty” came to my mind, and though I tried to grasp its nature, it disappeared, scattering into pieces where hung in midair. It is the “eye” that belongs to ANONYME. The “eye” necessary to give “answers” a slught. When ANONYME realised that I was not a customer, rather than seeming annoyed, he suggested he show me some other goods.

And so I came to this place. It is one of the marks that is a post station on the Tokaido line and a vertical axis at the foot of Mt. Fuji. It’s a position crossed on the coordinate. There is a window to gaze over the vast sea to the horizon in the room. From here I imagined a street stall at the corner of a foreign town. There was a face there that was mass-produced, destroyed, found, cherished, put away, forgotten, and asleep. There is a bird here that has experienced many times being insect-eaten, found, thrown away, picked up and sold. In this form, the time concentration of people’s actions is revealed. At this spot that enables me to change my focus while observing space I wondered if he cultivated his eyes to observe time in the same way. And I felt I couldn’t do that myself. The value of this one spot is endlessly complex.

After my short trip, still having not found my “answer” I found myself outside the basement room of the Wandervogel club. Unless you were a Club member, you were not allowed into the basement room. The entrance to the room was closed off by a heavy-looking door that was painted black. It looked like a door you would expect at a disco club or a shady game center, exactly the opposite of what I had imagined for the door to the Wandervogel Club. At the top of the stairs, three club members were having a lively conversation about rock climbing. Perhaps ANONYME was once here too. Such an idea floated by. As I knew them by face but not by name, I said hello with an exaggerated smile. And then I told them about my problem, all the while making sure I did not appear too desperate. However, when I asked, “Is it difficult, isn’t it?” all three of them replied in unison “not at all”

Everyone who succeeded says that it is “easy”
Well then, what “answer” shall I turn in?

The original was first written in 2009. The second edition was revised in co-authorship with Hiroaki Morita. Exhibited together with art works by H. Morita at “Ryugu is Over” (2012, Ryugu-bijutsu-ryokan, Kanagawa-pref., Japan). The current edition was third revised in the co-authorship with an antique shop ANONYME for the exhibition of Ari Ookubo’s work, ‘For a good answer you get admitted to the Wandervogel Club, or, for a reasonably good answer you get 4,000yen’ at FUJINOYAMA Biennale, Shizuoka-Pref. in 2016.

Translators: Michiko Kurokawa (for the third paragraph _ 3rd revised ver.), Naoyuki Arakawa and Tine Van Broeck (for original ver.)
Co-translators: Alexander Matson (for the third paragraph _ 3rd revised ver.), Yuki Okumura, Tomb Lamb and Yuki Lamb (for original ver.)